

人を神に祀る風習について
——福岡の幕末の志士平野国臣——

原 英 子^{*,**}

How do People Become Deified as Gods in Japan?
HIRANO Kuniomi, Late Edo Period Warrior in Fukuoka and His Shinto Shrine

HARA Eiko^{*,**}

Abstract

How does a person become deified as a god in Japan? As one interested in this form of spiritual worship, YANAGITA Kunio wrote a report about this type of faith in 1926. Japanese people believe that when a person dies having a deep-seated grudge against an enemy, the death causes some strange phenomena around the enemy. Japanese believe the strange phenomena will not disappear until the enemy worships the deceased person as a god.

The deification of deceased persons as gods is classified into two types by KOMATSU Kazuhiko. One type is based on the faith in deification stemming from the deceased person's grudge, as in the case mentioned above. The other type is based on the faith in a deceased person who has been deified by commendation from the government. Many Samurai warriors who were patriots of imperial rule at the end of Japan's Edo period (1880's) fall into this group. HIRANO Kuniomi (1828-64) was one of these Samurai warriors.

HIRANO had advocated national unification under the emperor. Therefore, he was killed by a warrior of the Tokugawa government only four years before of the birth of the new Imperial government in 1868. After the beginning of Imperial government, from

* 岩手県立大学盛岡短期大学部 ; Molioka Junior College, Iwate Prefectural University, Takizawa-city, Iwate Prefecture, 020-0693, kusaba@iwate-pu.ac.jp

** 九州大学大学院比較社会文化研究院 公立大学研修員

1869, he has been worshipped as a god at Shinto shrines in Kyoto and Fukuoka city. The Imperial government used such casualties as symbols of imperial loyalty. HIRANO was among these used as symbols of imperial loyalty until the end of the Second World War. After the end of the war, since 1957, HIRANO has been worshipped at his own shrine in his birth place of Fukuoka.

In this paper, I discuss the Japanese customs of faith in persons deified because of their activities, and those deified through commendation by the government, as described by HIRANO Tsuneomi.

キーワード：歴史の記憶，神格化，勤皇の志士，国家，地域性

Keywords: co-constructing of history, how people become worshiped as gods, Samurai warriors as late Edo period patriots of imperial Japanese rule, nation, locality

はじめに

福岡市の繁華街天神の西方に今川というところがある。以前は地行下町という足軽たちが住んでいた地域である。そこに平野神社という小振りの神社が建っている。福岡藩を脱藩した幕末の勤皇の志士，平野国臣を祀った神社で，その場所は平野が出生した土地ということである。小さいが立派な社殿が北側の海の方を向いて立っている。その東側に見上げるほど大きな石碑「平野国臣君追慕碑」や「平野国臣誕生之地」と書かれた石碑が立てられている。敷地の東の隅には，今の明仁上皇が生誕した1933年にそれを記念して地行（地名）の東西町共同会が植えた楠木が2本植わっている。樹齢90年近くになる楠木だ。敷地は幅が20メートルくらいだろうか。奥行きも20～30メートルといったところだろうか。いつ通ってもきれいに掃除がなされている。近所の人たちが清掃しているのだという。社務所はない。入口のところに平野の生涯についての冊子が入用の人は，近くの鳥飼八幡宮へどうぞという意味の内容を書いたボードが掛かっている¹⁾。

西に200メートルほども行かないくらいのところに鳥飼八幡宮が建っている。鳥飼八幡宮は，神功皇后が新羅より凱旋したころの時代にまで遡って起源が語られる古い神社で1,700年の歴史がある[鳥飼八幡宮 2015: 01]。鳥飼神社の小冊子には、「鳥飼八幡宮人物伝」として、

1) 鳥飼八幡には，氏子区域に点在する神社の祭祀を担当する宮司がそれぞれおり，平野神社もそうした神社のひとつとなっている。柳田国男が「人を神に祀る風習」で八幡宮との関係について触れているが，柳田は人を神に祀った社が八幡である事例について触れているので，鳥飼八幡に関係する宮司が，平野神社の祭祀をしている本稿の場合とは事情が異なる[柳田 1969]。

平野国臣がよく鳥飼神社に参拝に来ていたこと、生家がすぐ近くで現在平野神社となっていることなどが書かれている [鳥飼八幡宮 2015: 12]。

そもそも平野国臣とはどういう人物だったのだろうか。平野国臣はなぜ神として祀られるようになったのだろうか。

日本民俗学の創設に深くかかわった柳田国男が「人を神に祀る風習」というタイトルで文章を書いている。ここでは「人を神に祀る風習」が御霊信仰と大きく関係していることが指摘されている。

しかし平野国臣について、神社の説明板や冊子を見る限り、崇りとか怪異現象といった事項は書かれていない。またご利益についても書かれていない。書いてあるのは幕末の志士として活躍した生前の功績である。御霊信仰とは少し異なる性格をもっているようだ。平野神社との類似ですぐに思いつくのは西郷隆盛の南洲神社との対比であろう。彼らが神として祭祀されることについて考えるとき、幕末の志士たちの神格化という範疇でくられる問題となりそうである。

幕末の志士たちを神格化といった面からみるとどのような特徴をもっているのだろうか。こうした幕末の志士たちの神格化のなかで平野国臣はどのような特徴をもっているのだろうか。本稿では福岡藩の幕末の志士平野国臣が神社に祭祀されることをとりあげることで、日本で「人を神に祀る風習」について考えてみたいと思う。

そのために、まずは第1節で「人を神に祀る風習」はどのように注目されてきたのか見ていく必要がある。しかしこの問題は日本史、日本思想史、宗教学、日本民俗学、神道関連など多岐にわたる分野で扱われている。そこで本稿では柳田国男以降、柳田の影響を受けたいくつかの論文及び柳田説への反論をおこなっている日本思想史からの近年の研究、及び本論に関連する幕末の志士についての歴史学からの研究をみることにとどめておく。次に第2節で平野国臣についてどういう人物であったのか簡単に触れる。そして第3節では幕末の武士を祀る神社とその実態について、歴史学の高野信治の研究と資料をもとに平野国臣の場合について考えていく。第4節では、明治維新後、国家による勤皇の志士の扱いに注目する。平野国臣の場合、どのように英雄として語られていたのか、出版物の出版数の変遷なども取上げてみていく。高野信治も指摘しているように、幕末の志士の祭祀は地域とのかかわりが強いとされている。そこで、第5節では平野国臣の福岡での扱いについて、公による顕彰に関する動き、それに神格化についてみていく。このように、福岡の平野国臣を通して「人を神に祀る風習」について考えていきたい。

1 「人を神に祀る風習」はどのように注目されてきたのか

柳田国男は「人を神に祀る風習」という文章のなかでどのようなことを指摘していたのだろうか。柳田以降、日本民俗学は柳田の影響を大きく受けていくのでまずは柳田の文章を読むことが必要であろう。柳田国男の「人を神に祀る風習」、この文章は1926年11月発行の『民族』第2巻第1号に掲載されたもので、その後1969年に出版された『定本 柳田国男集』第10巻に収められている²⁾。

柳田は、日本人は、古い時代、神という語に「もう一段と強い、烈しい大きな力」を認めていたので、人を神に祀る風習が限定されていたのだが、それが近世になってその範疇を広げたと考えていた [柳田 1962: 472-473]。また、祭祀されるのは、自然に老衰死した者ではなく、遺念餘執があり、しばしば祟りをもって怒や喜を表示しえた者だとし、その形として御霊信仰を考えている。

宮田登は『生き神信仰』の中で、御霊信仰とは「生前恨みをいだいて、そのまま死んだ人間が、死後崇るのでこれを鎮めるために神として祀るのが、御霊信仰の特徴」だと指摘している [宮田 1970: 6]。宮田は、柳田国男が指摘した「人が神に祀られるという風習」のなかで、柳田が取り上げなかった部分に着目した。つまりこの「人を神に祀る風習」が、死後だけではなく、生前にも行われる場合がみられること、しかも死後祀られる場合は遺執による祟りがあるが、生前祀られる「生き神」の場合には祟りの発現がないことを明らかにしている [宮田 1970: 7]。

宮田は、柳田が着目した死後神に祀られる場合でも、柳田が取り上げたように生前の遺執をもって崇る御霊を祀る場合以外にも、祟りとは関係なく霊神に祀られる場合があることを指摘する。祟りとは関係のないものとして、「霊社」といったものがみられること、これには近世以降の吉田神道の関与により、人霊が祭神へと昇華されるようになったことを取り上げている。その最初は、豊臣秀吉を豊国大明神に祀ったことで、ここに死後人を神に祀る形態が成立したこと、秀吉に続き、徳川家康の東照大権現にも人霊の神への昇華がみられること、両者ともに封建領主としての強力な人格を背景に、こうした祟りをともなわずに神格化することが可能であったことを指摘している [宮田 1970: 15]。

「人はいかにして神になるのか」に関して、日本民俗学でも近年新たな展開をみせている。小松和彦は、人がなった神のことを「人神」と呼び、柳田以来の怨霊系統の「人神」と、生前に傑出した業績を残したのでそのことをたたえるために「神」として祀り上げる「顕彰神」系の「人神」との2タイプに分類した。怨霊系統は、鎮魂に力点が置かれ、怨霊の気持ちを

2) 柳田国男 1969『定本柳田国男』10 (筑摩書房) に収められている「人を神に祀る風習」の「序」部分は、「あとがき」によると1952年に「人神考序説」と題して国学院大学講義用テキストとして少数数出したものを付加しているとする [柳田 1969: 501]。

和ませるために祭礼をおこない、「社」を建てて「神」に祀り上げている。こうした社や祭礼、それに縁起物語といったメディアは、死者の生前死後の「出来事」を、時間を越えて記憶させる。この「記念・記憶装置」の「支配のための装置」としての機能に着目したのが、「顕彰神」系の「人神」なのだという。宮田のいう「霊社」もこちらのタイプにはいる。

小松は、怨霊系統は祟りをもたらす「祟り神」であるがやがて祟りが終息すると信者たちの守護神・福神へと変化し「顕彰神」化するといっている [小松 2020: 26-28]。

小松は西郷隆盛（1827-77年）を祀った南洲神社について取り上げている。西郷の死の翌年、夜空に出現した大きな赤い火星のなかに軍服姿の西郷が見えるという噂が広まり、結跏して後光を発する西郷の錦絵や絵入り新聞がこれを取り上げるという事態がおこった [小松 2020: 162]。これは西郷を神仏のように崇める視点の萌芽で、2年後の1879年には有志の者たちが現在の南洲墓地に、西郷以下戦死者の遺骨を改葬し、「参拝所」を建設している。その後「参拝所」は改築し、1913年に「南洲祠堂」と称するようになった。それが1922年、墓地と一線を画したところに「南洲神社」を創建し、西郷は「仏」から「神」になったといっている。また、西郷の没後100年の1977年には西郷南洲顕彰会が結成され、1978年には、鹿児島市立の「西郷南洲顕彰館」が建設された。これにより、墓、神社、顕彰館という西郷という個人を記憶するための装置がコンパクトにまとまってできたことを指摘している [小松 2020: 176-178]。

佐藤弘夫『ヒトガミ信仰の系譜』（2012年）では、柳田国男の指摘以来続くヒトガミに関する考察で御霊信仰からの発展とする説に疑問を唱えている。それを覆すため、(1) ヒトガミが奈良時代以前に存在すること、(2) それは祟り神とは異なる系列である、という2点を論証することを目指している。そこでまず展開されるのが、天皇霊をカミと同列にとらえることができるという点である。これらを『日本書紀』や『続日本紀』などから考察していく [佐藤 2012: 17-19]。そうしたヒトガミがやがて善神と悪神、つまり恵みとタタリという機能が分裂し、暗黒面をになうカミがヒトガミに連なる死霊となり、やがて政変により死においやられた人々を「御霊」として祭祀することで、災難の閉塞を願う信仰が出現したとみている [佐藤 2012: 85-88]。日本思想史を専門とする佐藤は、この問題を、認知考古学の視点から取り扱っている。すなわち、ヒト属がもつ認知構造の共通性から「ヒトが進化の過程で獲得した、ある発展段階における心の働きの普遍性」から、カミが「その姿をあらわにし」ていくプロセスを明らかにしようとしている [佐藤 2012: 5-8]。

及川祥平『偉人崇拜の民俗学』（2017年）では、近代日本の人物顕彰に、天皇制的歴史観のもとでの歴史再編が行われ、支配的イデオロギーとして地方に作用していったことを指摘している。そこでは「郷土愛」と「愛国心」をつなげていくために、1889年の帝国憲法発布にともなう「維新の内乱の和解という政府の方針」をもって、大赦令や贈位、賊軍への慰霊

をおこなっていった。それはローカルな歴史的価値を国史的な価値とすり合わせ、成型しなおしていく過程であるとする〔及川 2017: 90-92〕。及川が指摘する政府からの贈位や慰霊といった面はこれから見ていく平野国臣の場合にも明治時代に行われており、参考にしたい。

最後に歴史学の高野信治がおこなった研究、『武士神格化の研究』を取り上げておく。高野は、江戸時代に顕著となる武士の神格化の問題をあつかっていて、平野国臣の場合を考えるとき重要である。高野の『武士神格化の研究』は研究篇と資料篇にわかれており、資料篇には日本全国の神格化された武士を祭祀する神社の資料が掲載されている。400頁以上にわたって表が続いており、この資料の分厚さを見るだけで、神格化された武士の多さがわかる〔高野 2018a; 高野 2018b〕。

高野が同書の研究篇で指摘したのは、人の神への祭祀は古くからみられるもので、この世に恨みを抱いて亡くなった祟る怨霊を祀ることで福・善をもたらす御霊にするというものを中心であったが、近世・江戸時代になり、民政に意を尽くし、またそれをめぐる政治抗争などで落命したものなどの祭祀も目立つようになったことである。

高野は次のことも指摘している。すなわち江戸時代には、武士本来の性格を背景とした神格化は必ずしも一般的ではなかったのだという〔高野 2018a: 210〕。ならば江戸時代以降、何があったのか。高野は小松和彦の言を引用しながら次のことをいっている。明治維新後、天皇制国家が成立すると、倒幕、勤王のための結集が、新政府へ奉仕させるためのシンボルへと変質していく。忠臣としての「義」は、「近代になって死を厭わない忠節と理想化され、天皇・国家への民（臣民）としての忠と等価されるようになると推断される」という〔高野 2018a: 80〕。

「人を神に祀る風習」は、柳田の崇りと御霊信仰から、近年の「記憶」装置としての祭祀という側面について注目点が展開し、地域性や国、国の歴史との関係を考える視点が加わってきたといえる。

平野国臣が神へと祀られる過程において、その神格化の背景にはどのような社会的情勢があったのであろうか。こうしたことについて見ていく前に平野国臣についてどういう人物であったのかを見ておこう。

2 平野国臣（1828-64年）について

平野国臣について、概略しておこうと思う。『平野国臣伝』は複数あるので、それらを参考にした。それらによると、平野国臣の先祖は、中世高祖城^{たかす}の原田氏に仕えた弓馬の家で、原田氏滅亡後黒田氏が福岡に来た後、三苦という姓を名乗り大庄屋をしていた家だという。祖父の代に町人の家の娘婿となり米屋吉右衛門を称していた。国臣の父は幼いころより武芸を

好んでいて、のちに黒田家の足軽の嗣子となって平野の苗字を継いだという。使杖縄縛の術と拳法に長け、指南役をしていたという。兄弟は4男、2女で、国臣はその次男だった [春山 1929: 12-18; 平野国臣顕彰会篇 1980 (1917): 10-17]。

平野は歌人として知られている。母親が百人一首を子守歌代わりに毎夜寝床で聞かせており、5歳のころには百人一首の大半を暗誦していたという [小河 2004: 20]。歌人としての平野はそうしたことも影響していると思われるが和歌や書、儒学や国学の勉強もしている [春山 1929: 19]。

1838年、数えの11歳のとき（以下年齢は数え年である）鉄砲大頭の家へ侍童として奉公した [小河 2009: 20; 平野国臣顕彰会篇 1980: 17]。その勤めぶりを見込まれ、14歳の時に実父とも親交があった鉄砲頭小金丸彦六の養嗣子となった。1845年（44年の説もあるという）、18歳ごろ福岡藩に仕官し、翌46年には江戸藩邸勤務となった [平野国臣顕彰会篇 1980: 17-18]。3年間江戸に勤務したのち、福岡に帰り、養父の娘と結婚した。江戸へ赴いた年は、アメリカの捕鯨船が浦賀に入港したり、長崎にイギリス船が現れたりした年であった。1853年、26歳の時に2度目の江戸赴任があったが、このときペリー来航があった。翌年福岡にもどった。その翌年1855年は長崎に赴任し、外国人から多くを学び、「天下ヲ一ニスル」という構想を持った [小河 2009: 10]。こうした江戸や長崎での経験が、平野の考え方を変えたとみなされている。1858年正月に志士と交わり始めたが、養家ではこれを喜んでいなかったため、1男2女の子どもがいたが、小金丸家を出て、厄介分の浪人として平野姓にもどり、名も国の臣ということで国臣とした [小河 2004: 270-277; 平野国臣顕彰会篇 1980: 28-32; 海音寺 1975 (1968) : 70]。ここから志士としての活動が本格的に始まった。

平野神社が作成している『平野二郎国臣』という冊子に国臣の年譜が掲載されているので、ここから主な活動を拾い上げると次のようなものがみられる。1858年に脱藩したあと、西郷隆盛と僧月照の薩摩落ちに出会い西郷らを薩摩まで送り届ける役目をおっている。1860年には、福岡藩主へ「建白書」を提出するが、上書により、福岡藩の搜索をうけることになる。潜伏のため薩摩入りを果たすが、公武合体の薩摩に対し、国臣の「幕府滅亡・国家統一」は受け入れられず、後に有名となった歌を詠んだ。「我胸の燃ゆる思ひにくらぶれば 烟はうすし桜島山」である。その後1862年に寺田屋事件に関連して福岡藩に収監されるが、翌63年に朝廷より大赦で出獄する。この投獄生活中、筆記具を与えてもらえなかったので紙でこよりをつくり、飯粒で貼り付けて文字表記したこより文を使って考えをまとめた書を著している。

1863年文久3年8月18日の政変で、平野国臣は、七卿のひとり澤宣嘉を擁立し但馬の生野で挙兵するが、敗れ、捕らえられた。一方、澤らは、脱出に成功していた。1864年の禁門の変がおこったとき、国臣らは獄中にいた。砲火で火勢が京中に広がる中、この騒動を機会

に破獄を企てるものが出てはいけないうと、処刑された [平野神社 2009]。

3 幕末の武士を祀る神社と平野国臣

平野国臣という名前や、平野神社というのが福岡市にあるといっても、現在では平野国臣について知らないという人も多いのではなかろうか。高野信治は、古代から現代まで、神に祀られた武士の神格化について研究している。そうした神となった武士は2,431人だと数えている。そのなかで、100か所以上で祭祀されているのは3人にすぎず、次が2から5か所の267人であること、それに対し1社でしか祭祀されていない武士は2,112人で、全体の95%にあたるという。つまり、高野は神として祀られている武士を祭祀する神社は地域性が高いと指摘している [高野 2022: 26-27]。

高野は武士を祭祀する神社の時代性にも注目していて、武士が発生したとされる平安時代以降の武士の祭神数を数えている。その中で最も祭神が多いのが江戸期で1,672件。全4,710件中、35%を占めている。また幕末維新时期を別にカウントしており、680件に上る [高野 2022: 28]。全体の14%である。平安期、鎌倉期など、それぞれの時代の長さが違うのではあるが、江戸期の全体に占める祭神の割合、特に幕末維新时期の年代的な長さに対する祭神数の多さは注目すべきことである。つまり、江戸期を江戸幕府が成立した1603年から、大政奉還があった1867年までとすると265年間となる。幕末の始まりをどこにするのか、疑問ではあるが、天保の改革が終了する1853年だとしてみよう。そこが始まりで、維新时期の最後は、最後に祭神となった武士が西郷隆盛だと高野は考えているので、西南戦争があった1877年までが維新时期だとすると、24年間である [高野 2022: 28]。幕末維新时期の武士たちが、四半世紀ほどの間に全体の14%を占める数が、祭神として神社に祭祀されていることがわかる。幕末から明治維新にかけて活躍した武士が、神として祀られているケースは稀ではないのである。平野国臣もそうした一人だった。

4 維新後の尊王の志士としての平野国臣の扱い

4-1 維新後の英雄としての扱い

現在では全国的に、平野国臣のことを知る人はそれほど多くないかもしれない。福岡に住んでいる人たちの間でも平野の知名度は高くないようである。しかし、明治以降、アジア・太平洋戦争が終了するまでは、国家によって幕末の義士、忠臣として子どもたちに模範の人として教えられていた。

富田安敬が1887年編纂した『近世絵本英名伝』には、木戸孝允、林子平、それに西郷隆

盛と行動をともした僧月照らとともに、英雄のひとりとして平野国臣も紹介されている。

また、白川鯉洋著・山中古同画の1901年に出版された少年読本第34編にも『平野国臣』が取り上げられている。少年読本は全巻50冊である。この雑誌の宣伝をみると「近世の英雄、豪傑、高僧、烈婦人、学士などの伝記」をとりあげている本だと書かれている。文章に絵が挿入されている本で、子どもたちにその人物をわかりやすく紹介している。平野は、こうした50人の英雄・豪傑のひとりとして取り上げられる存在であったのだ。

平野を尊王派の志士として扱う立場は、明治以降、アジア・太平洋戦争のころも持続していた。1942年に出版された『英雄を語る』では藤田東湖、橋本佐内、吉田松陰らとともに平野国臣も取り上げられている〔頭山1942: 89-126〕。

そのほかにも、1944年には大坪草二郎が新日本文芸叢書に『平野国臣』（錦城出版社）という小説を書いている。表紙には、赤子を背負った女の子と、その妹たちだろうか、日の丸の旗をそれぞれもった年の違う女の子2人が描かれている。内容は、平野の活躍から死までを、会話文を多用しながらわかりやすい文体で書いている。平野が神皇正統記を講じているとして「大日本ハ神国ナリ。……（中略）……神代ニハ、豊葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ国トイフ。……」などの文章も挿入されている。そうした日本の開闢神話を挿入しながら、平野の一生について書いた小説が、アジア・太平洋戦争終戦の前年に出版されているのである〔大坪1944: 270-271〕。

平野国臣について書かれた出版物をみると、先に高野信治が指摘した点、明治維新後、天皇制国家の成立とともに、倒幕、勤王の志士たちが、新政府へ奉仕させるためのシンボルへと変質されていく過程や、忠臣としての「義」が、「死を厭わない忠節」、天皇・国家への民（臣民）としての忠を貫いた人物として、戦争に関与していく様子がみられるのである〔高野2018 a: 80〕。

4-2 アジア・太平洋戦争終了まで増加した出版物の出版

平野国臣に関する本について、国立国会図書館のオンライン蔵書で「平野国臣」を検索したら313件をヒットした（2022年11月2日検索）。そのうち、重複しているもの、シリーズもので平野のことが書いていない巻号などの出版物をできるだけ除いた結果、287件となった。これを10年毎にまとめて冊数の変遷を示したのが表1である。

表1をみると、明治維新直後の1870年代くらいまでに

表1 平野国臣関連出版物の年代別出版数の変遷

| 西暦 | 冊数（件） |
|---------|-------|
| ～1870年代 | 9 |
| 1880年代 | 8 |
| 1890年代 | 30 |
| 1900年代 | 28 |
| 1910年代 | 38 |
| 1920年代 | 20 |
| 1930年代 | 51 |
| 1940年代 | 68 |
| 1950年代 | 3 |
| 1960年代 | 14 |
| 1970年代 | 9 |
| 1980年代 | 9 |

平野を取り上げた書物がすでに9件みられる。その数が急激に増えるのが1890（明治23）年代以降である。このころの出版物では、多くが平野を勤皇の志士、英雄的存在として扱っている。

1900年代の28件、1910年代の38件、1920年代の20件と10年で20冊台から40冊近くまで出版されていたものが、1930年代には51件、1940年代には68件とそれまでの倍の量に出版物が増加している。しかも1940年代は、終戦の1945年までに出された出版物であったので、この時期にいかに集中的に多くの出版物が出されていったのかがわかる。

出版物が増加した1930年代の歴史的事件をみると、1931年に満州事変がおこり、1937年には盧溝橋事件を発端とする武力衝突がおこり日中戦争となった時期である。1941年には太平洋戦争が始まっている。そういう時代を背景に、平野国臣に関する出版物も1930年代から40年代にかけて増加していることが表1から読み取れる。

明治維新後、天皇制国家の成立にともない、倒幕、勤王の志士たちが新政府へ奉仕させるためのシンボルへと変質していく過程、忠臣として「死を厭わない忠節」[高野2018a: 80]が、戦争の激化とともに理想化され、子どもたちに教えられていった状況が、表1の平野国臣に関連する出版物の出版数の変遷にみられるのである。

5 福岡での扱い：顕彰と神格化、そして戦後の神社建立

5-1 維新前の扱いと維新後の顕彰

1892年に今田主税著による『国士模範 平野国臣』が東京堂出版より出版されている。この本には平野国臣が明治になって、政府や天皇家から、祭祀料や追賞がなされ、生前の功績が認められていく様子が記載されている。明治も25年も経ったこの頃は、勤皇の志士は、本の題名に示されるように、まさに「国士模範」となっていたのである。

同書によると、生野の変で脱出に成功した澤宣嘉は、明治初年、長崎県知事となっているが、その澤が任地に赴く時、福岡の国臣の家に香華料を若干おくっていることが記されている[今田1892: 176]。

また明治己巳の春（明治2年、つまり1869年のこと）に福岡藩が追賞して京都の霊山と当時の福岡市郊外の千代の松原に招魂社が立てられ、祭典を行い、親族に永世禄20枚を与えている。その他にも1871年に遺子小金丸平太種二に4人口を与え士籍としたこと、1882年に京都霊山に国臣の旧友などが平野の忠功を伝える碑を建てたところ、朝廷より祭祀料が出されたこと、1891年に正四位を贈られたことが、平野国臣について書かれた書物に記されている[今田1892: 176-177; 春山1929: 629]。

脱藩し、投獄中に処刑された平野であったが、明治になり、福岡藩や朝廷からも祭祀料が

支出され、贈位されたことは、まさに国の臣としての存在になったことを示している。招魂社に祭祀されたことで、ここで神格化されたとみることもできよう。

ただし、こうした平野を志士の英雄として扱う扱いは、維新前と、明治になった後とでは変化があったようだ。春山育次郎の文章に次のものが見える。「当時は殉難の志士を尊敬するの風気、未だ今日の如く盛んならず、各所の寺院は、久しく遺棄せられた遺骨を嫌ひまして、地を与えて収葬することを許しませぬ」とある〔春山 1929: 627〕。そのため、1864年、つまり維新の4年前に亡くなった平野の場合、遺骨もどこに埋められたのかわからなくなっていたようである。1877年に刑場跡から遺骨を取り出して寺院に埋めたという。しかしその後、再び埋葬寺院や寺院の墓地での位置もわからなくなったので、殉難者の五十周年忌を期に三十余人の殉難者の合葬とともに平野も祀られたのだという〔春山 1929: 629〕。維新前、志士たちはそのような扱いだったのである。

5-2 大正期の顕彰会の誕生と戦争による平野国臣のシンボル化

平野の死後五十周年忌を控えた1911年に顕彰会ができていた。その4年後、1915年には荒津山の公園（現在の福岡市西公園）に銅像が建てられている〔春山 1929: 630〕。福岡市西公園は、1872（明治4）年に福岡藩主の黒田孝高、長政を祀る光雲神社が、福岡城より移されてきている。荒津山は福岡藩にとってはそのような場所であった。平野の銅像は、まさにそのような場所につくられたのである。

また、銅像と時期を前後して、追慕の碑（1915年）と生誕の碑（1916年）が国臣の家があった生誕の地に立てられている。1924年に博多湾鉄道汽船株式会社が出版した『沿線案内』には福岡の名勝が書かれているが、そのなかに「新博多駅」付近の名勝として、「平野国臣生地」が載せられている〔博多湾鉄道汽船株式会社 1924: 40-41〕。平野国臣は、急速に、市民の目に触れる形でシンボル化されていったのである。

忠臣として平野と天皇との関係は、地域の人々にどのくらい意識されていたかは、1933年に天皇家の子どもが誕生したときに町の共同会が楠木を神社の敷地に植えていることにもうかがわれる。

戦争が激化していく1943年には、荒津山（福岡市西）公園の銅像が供出された〔春山 1929: 630〕。そして1945年に終戦となった。

5-3 戦後の継承

平野国臣の勤皇の志士としての扱い、つまり天皇を中心とした国家の忠臣としての役割は、先述の表1. 出版物の出版数の変遷をみると、終戦で終了したように見える。しかし、戦後も1952年に平野の生誕地に平野を神に祀りあげた平野神社ができ（写真1、写真2）、平野



写真1 福岡市にある平野神社
(2022年10月15日撮影 撮影者 原英子)



写真2 平野神社社殿
(2022年10月15日撮影 撮影者 原英子)



写真3 西公園にある平野国臣像
(2022年10月29日撮影 撮影者 原英子)

の死後100年経った1964年には荒津山（福岡市西）公園に銅像が再建されている（写真3）。ここには、平野の記憶を引き継ぎたいという意味をもった人々がいることがうかがわれる。

平野神社の宮司、山内宜^{のりひろ}氏の話によると、平野神社は主に平野国臣の直系や国臣の兄弟の子孫たちからなる顕彰会があり、そこが中心となって神社の建立や銅像の再建をおこなってきたのだという。先述のように顕彰会は平野の死後五十周年を控えた1911年にできたが、そのとき、京都の寺の平野国臣の遺骨があったとされる場所の砂を持ち帰り生誕地に埋め、金字で「平野二郎国臣」と記した石造の奥津城^{おくつぎ}（いわゆる神道式の墓）をつくり慰霊祭をおこなっていたという。戦後、顕彰会が宗教法人となって奥津城の場所に社をつくり、平野神社として祭祀をつづけている。

福岡市西公園に銅像が再建された3年後の1967年には、平野神社の社殿が改築されている。1983年には、歌人としての平野の、有名な和歌を刻んだ歌碑が建てられている（写真2 社殿左側前方）。また、神社の入口の石の鳥居は2006年に寄進されている。それほど頻繁にはないが、二十年くらいの間隔で、大きな寄進物が神社の敷地に造られている。これらのことより、平野国臣の記憶を受け継ごうとしている人々が継続していることがわかる。

5-4 平野国臣の神格化

5-1に示したが、1869（明治2）年に平野は京都と福岡の招魂社に祭祀された。この時点で、平野国臣は神格化されたとみることできるが、戦後の1952年には平野神社が建てられているので、平野を祀る神社の創建により、幕末の志士平野国臣の神格化が独立した神として完成したとみることできる。

平野が神格化していくまでには、勤皇の志士に対する江戸幕府の対応と明治維新後の国家の対応の違い、そして明治以降の戦争の歴史をとおして英雄としてあつかわれていく過程、それに戦後の宗教法人化と神社の建立といった事象を、その背後に流れる歴史と政治との関りから見ていく必要がある。

おわりに

「人はいかにして神になるのか」という問いは、これまで多分野で、いろいろな議論がなされてきた。近年、記憶との関連から新たな問題の方向に発展している。小松和彦は、柳田以来の怨霊系統の「人神」と、生前に傑出した業績を残したことを称える「顕彰神」系の「人神」の2タイプに分類した。「顕彰神」系の「人神」は、「支配のための装置」と絡み合い、時代を越えて記憶されていくというのだ〔小松2020: 26-28〕。小松によれば、西郷隆盛らを祀った南洲神社は、墓、神社、顕彰館という西郷という個人を記憶するための装置をコンパクト

にまとめることに成功しているのだという [小松 2020: 176-178]。

平野国臣の場合を小松のタイプで見ると、怨霊系ではなく、顕彰神のほうに分類されそうではあるが、彼の最後は、怨霊系に分類できそうである。小松のいう2タイプのどちらにも入る要素をもっている。明治以降の顕彰的なものをみていくと、生前の勤皇の志士としての活躍は、明治維新後の新政府のイデオロギーに呼応し、新たに長崎県知事や福岡藩主、天皇を中心とした新政府に評価されているのを見ることができ。そこには福岡の英雄という地域の偉人が、そのまま「愛国」精神を貫いた忠臣として、国家と密接につながっていたことを、その顕彰に、そして平野のことを紹介した出版物にみていくことができた。幕末・維新期に増加した武士を神格化する風習は、勤皇の志士を中心になされ、地域で活躍した忠臣を「国家」とつなぐそうした役割が大いに期待されていた。そうした地域と「国家」をつなぐシンボリック的存在であった特徴を、平野国臣の場合にもみることができた。

忠臣としての国家との関係は、アジア・太平洋戦争の終戦で一段落を迎えたが、平野の慰霊碑が、戦後に神社として創建されたことにより、何らかの形で平野国臣の記憶を継続しようという試みが継続されていることがうかがわれた。西郷隆盛を祭祀する南洲神社が、墓地や顕彰館といった公的な歴史を紹介する施設とセットになって展開しているように、神格化した武士の存在を、公的な歴史と結合させる施設は、ローカルなものや国とを結びつけることによって、人々の記憶に残すことができる。この点、歴史との結合は今後更に重要になっていく可能性がある。

平野神社の場合、現在も福岡市による平野国臣の説明板が設置されており、公的な歴史との結合が試みられている。しかし土地の神である氏神と違い、土地との結びつきというより子孫等、血縁による祭祀という色彩をもっているため、地域への広がりや氏神のようにはいかなないようである。また、観光客が訪れる場所としての認知度は高くない。ただし近年、「平野」姓をもつ人気芸能人にあやかりたいという芸能関係者やファンが、参拝に来ることが増えているとのことである。こうした芸能ファンとの関係は、今後地域おこしのひとつとして地域とのかかわりが起こってくる可能性がある。

本論では、平野国臣の祭祀について、その時の政権との関係で、扱いが変遷してきたことを見てきた。平野国臣を含む勤皇の志士たちが、江戸幕府における扱いと明治政府における扱いが変わったこと、国家による戦争のなかで、勤皇の志士たちが天皇への忠臣として英雄となっていたこと、戦後の国家や天皇制の変化のなかで、勤皇の志士たちの扱いに変化があったことなどに注目し、記憶にとどめようとしている人々がいることを指摘した。

高野信治によると、幕末維新期に祭祀された武士は680件に上っている。しかもそのほとんどは地域性が高い祭神だという [高野 2022: 28]。そうだとすると、平野国臣を、ほかの地域性の高い幕末の志士たちの場合と比較することにより、もっと具体的に祭祀の状況が明

確になるはずである。そうすることで、「人を神に祀る風習」の幕末の志士の祭祀の傾向や特徴がもっと具体的にわかってくることが期待される。

また近年、「人を神に祀る風習」は、アニメ等の聖地巡礼など、従来の信仰的要素とは異なる理由を契機に、参拝という行為を生み出すきっかけが生じることがあり、神社と地域との新たななかかわりが生み出される動きとなる可能性もある。芸能ファンの動向と神社の対応など、今後注目する必要がある。

参 考 文 献

及川祥平

2017『偉人崇拜の民俗学』勉誠出版

大坪草二郎

1944『平野国臣』新日本文芸叢書、錦城出版社

小河扶希子

2004『平野国臣』西日本新聞社

海音寺潮五郎

1975 (1968)「平野国臣」『幕末動乱の男たち』上巻 新潮社 61-122

小松和彦

2020『神になった日本人：私たちの心の奥に潜むもの』中公新書ラクレ

佐藤弘夫

2012『ヒトガミ信仰の系譜』岩田書院

白川鯉洋著・山中古同画

1901『平野国臣』少年読本第34編 博文館

高野信治

2018a『武士の神格化の研究』研究篇 吉川弘文館

2018b『武士の神格化の研究』資料篇 吉川弘文館

2022『神になった武士 平将門から西郷隆盛まで』吉川弘文館

頭山満述、吉田靱明記

1942『英雄を語る』時代社

富田安敬

1887『近世絵本英名伝』

鳥飼八幡宮（高野龍也編集）

2015『むすびの神・鳥飼八幡宮由緒書』鳥飼八幡宮

春山育次郎

1929『平野国臣伝』平凡社版

平野国臣顕彰会篇

1980（1917）『平野国臣伝記及遺稿』象山社

平野神社（小河扶希子編集）

2009『平野二郎国臣』平野神社

宮田登

1970『生き神信仰』塙新書

柳田国男

1926「人を神に祀る風習」『民族』2-1 pp.1-36 「民族」発行所・発行

1969「人を神に祀る風習」『定本 柳田国男集』10 筑摩書房 pp.472-498

令田主税

1892『国士模範平野国臣伝』東京堂蔵版

謝 辞

本稿をまとめるにあたって、平野神社の宮司山内宜大様には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。